

妙好人研究の系譜

A History of the Studies of *Myokonin*

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-Ichi

ABSTRACT:

In this paper, the focus will be put on the history of the studies of *Myokonin*, literally 'the blessed.' They are the pious believers of the Joudo-Shinshu sect. Interestingly, only the faithful believers of this sect have been distinguished as *Myokonin*, never for those of the other sects. The *Myokonins* followed the Joudo-Shinshu doctrine listening to the preachings, and some of them left enormous writings such as anthems, poems, and *tankas*. Since the first biographies of them were compiled in the 1750s, studies of *Myokonin* themselves have been established as one branch of the Buddhism.

KEYWORDS:

浄土真宗 (Joudo-Shinshu Sect)、他力門 (salvation by faith alone)、妙好人 (*Myokonin*, the blessed)、かしこだて (pretend-to-know)

第一節 はじめに

浄土真宗には、篤信の在家信者として妙好人という人物像が伝統的に作り上げられてきた。他宗派にも篤信の信者は居たであろうが、何故か門徒だけが妙好人と呼ばれて区別されてきた。背景としては他力門として戒律や修行を排し、専ら聞法によって信仰を篤くするという考え方があったのであろう。古くは蓮如上人と同時代である赤尾の道宗翁が知られているが、これは五百年も前の人物である。妙好人がより一般化するの江戸時代に入ってからである。大和の清九郎翁が元禄年間の生まれで最も早く、続いて長門のお園媼は江戸後期で二百年ほど前、幕末の頃に妙好人として最も名高い石見の才市翁が現れる。このような妙好人を研究する歴史も、古くからあった。妙好人の言動は口承で伝えられたこともあるが、書かれた記録として残っていれば、それは研究であると言える。そもそも自らが自分の言行を書き残すようでは妙好人とは言えない。周囲の人が感銘を受けて、「これは記録に留めておかねば」というように積み重ねられたのが歴史になったと言えるであろう。

近代、あるいは現代と言える時代には、鈴木大拙居士が本格的な妙好人伝を上梓するようになる。これは時代が下っているので、何人もの妙好人を様々な角度から比較対照することもできる。大拙居士は外国にも長く暮らしていたので、仏教以外との宗教とも学問的な見地で論じることができた。世紀の替わり目を経ると、関山和夫氏らの書が次々と世に出されてきた。こ

れをどのように捉えるべきであろうか。一つ考えられる事情としては、妙好人が同時代人ではなくなり、「歴史」として位置付けられるようになったという経緯があるのではないであろうか。現代社会が余りにも複雑になってしまったために、素朴に信仰だけに生きていくという考え方は実質的に不可能である。これは善悪の問題ではない。時代の必然とも言えるべき変化であり、歴史の大きな流れに逆らうことはできない。これから「妙好人」と位置付けるに相応しい篤信の門徒が現れる可能性も皆無ではないであろうが、時代の変化がそれを許さないように思われてならない。

本研究はこのような妙好人研究の系譜を辿り、真宗に特有である妙好人という生き方について考察を進めていく。過去の妙好人研究でも、妙好人が他宗派の篤信な信者とのように異なっているか等諸点が考察されていた。本研究もその延長線上として、妙好人研究の系譜を学問的に論じてみることを目的とする。本研究によって、妙好人という生き方を通して真宗の教義や布教の歴史などについても理解が深まることを希望するものである。

第二節 妙好人列伝

本節では拙論「妙好人という生き方」から引用して、これまで研究されてきた主な妙好人について概観を行う。

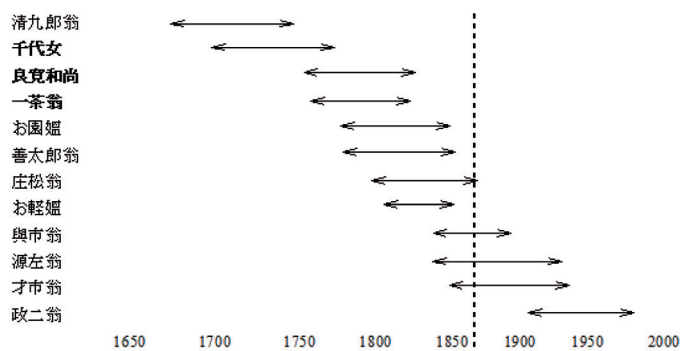
直林師の『妙好人』という著は、副題を「日暮しの中にほとばしる真実」とし、真宗固有の信心を紹介している。この分野では最も新しい刊行であり、ここを手がかりとして妙好人について知るには最適と思われる。まずは冒頭で「妙好人とは、苦悩に満ちた日暮の中で煩惱に染まらぬ信心の花を咲かせた、市井の浄土真宗念仏の行者」と紹介している。妙好人の定義というよりは、直林師が妙好人をどのように捉えているかという見方であろう。拙論「妙好人という生き方」で紹介した十人に加えて、以下で追加する三人は太字で示した。この三人は、時代的に清九郎翁とお園媼の間を埋めるような生没年代になっている。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| (1) 赤尾の道宗翁（生年不詳～1516） | 大和の清九郎翁（1680～1750） |
| 加賀の千代女（1703～1775） | 良寛和尚（1758～1831） |
| 一茶翁（1763～1828） | 三河のお園媼（1777～1853） |
| 石見の善太郎翁（1782～1856） | 讃岐の庄松翁（1799～1871） |
| 長門のお軽媼（1801～1856） | 椋田与一翁（1841～1893） |
| 因幡の源左翁（1842～1930） | 浅原才市翁（1850～1932） |
| 斎藤政二翁（1919～1984） | |

ここで仮に「翁、媼」というように敬称を附しておいたが、一般的に妙好人として「真価を発揮する」とようになるのは老境に入ってからと考えるのが自然であろうという前提に基づくだけに過ぎない。実際の生涯では、青年や壮年代から篤信の人となっていたこともあり得る。生年が不詳である道宗翁を除けば、十二人の平均生涯は六八歳余りである。現代のような長寿化を迎える数十年前まで「人生五十年」と言われていた事を思えば、総じて妙好人は長寿を保ったと言える。最も短命だったのがお軽媼で行年五十六、長命は源左翁で八十八である。信仰について思索を深めるにはそれ相応の時間を要するというような事情が窺えそうである。男女別

では、男性十人に対して女性三人という比率である。

ここで理解のために、生存年代を図示してみよう。時代が離れている道宗翁を除く十二人は、このようになっている。明治維新の年は破線を引いて示してある。



前稿「妙好人という生き方」では清九郎翁とお園唄の間に二十七年という間隔が空いていたが、今回三人を追加したことでその隙間が埋まった。このことによって、江戸時代半ばから幕末までの妙好人史が連続してたどれるようになった。

蓮如上人と同時代人であった道宗翁は、恐らく応仁の乱を経験したことであろう。世は已に戦国時代に入っており、周囲は落ち着いて信心に専念できるような情勢ではなかった筈である。戦乱が治まって江戸時代に入った清九郎翁の生年は、ちょうど五代綱吉將軍の治世が始まった年であった。島原の乱からも半世紀が過ぎて、世の中は落ち着いていた。それから六代家宣將軍と七代家継將軍（数え八歳で逝去）、八代吉宗將軍を経て翁の没年は九代家重將軍の世であった。翁の行年は数えの七十一と、当時としては長命の部類と言えるであろう。

お園唄、善太郎翁、庄松翁、お軽唄は幕末の世を生きた。庄松翁は行年七十二と長命で、維新を生き延びた。逆にお軽唄は五十六歳で没したのであるが、この辺りが当時の平均寿命であろうか。

與市翁、源左翁、才市翁は幕末の世に生を受けて明治維新を経た。世の中が大きく変わっていく中でも信心を貫いた生き方は尊い。政二翁は大正時代のお生まれで、昭和の世を生ききった。明治維新からは西南戦争以降日清、日露、第一次大戦、日中戦争と太平洋戦争と国内外で戦が絶えることはなかった。平和憲法によって日本は戦をすることがなく、親鸞聖人の「世の中、安穩なれ」という念願は表面的には実現されたようにも思われる。しかし聖人や平和憲法の精神を更に突き進めて、真に全世界から争いがなくなるようにと祈念して行動に移すのが門徒としての心得であると考え。近年の自民党政権の右傾化に見られるように、日本が核兵器を造って保持するなど軍靴の足音が聞こえてくるような時世はご開山聖人のみ教え「世の中安穩なれ」とは相容れないと言えよう。

戦後は高度経済成長期を経て、物質的な豊かさは急速に満たされた。電化製品が普及したこ

とによって炊事や洗濯、入浴という家事労働は負担が大きく軽減された。しかしその分が精神生活の充実に振り向けられたかという、全く逆であったというように思われる。経済活動が拡大したのに伴い、拝金主義が幅を利かせるようになった。経済至上主義の下に、精神生活が蔑ろにされるようになってきたのではないか。妙好人のように、「信心が後生の大事」と素朴に考える人物像は顧みられることが皆無となってしまったのであろうか。

まずは上掲十人の妙好人について、その生き方をざっくりと纏めてみる。これも拙稿「妙好人という生き方」から抄引用とする。

道宗翁

道宗翁は蓮如上人と同時代の人であり、永正十三年に没している。今から約五百年前である。時代的には、妙好人の祖とも言えるべきである。上人のお側にあるときは警護役を務めたり、弟子として教えを請うたというような経緯が『御一代記聞書』に記されている

越中の五箇山は冬になると雪に埋もれる土地であるが、月に一度は七里離れた井波別院までお勤めに通ったという。赤尾の里は、その五箇山でも飛騨に近い、最も奥まった地であった。道宗翁は刻苦勉励の人であった。蓮如上人の御文を二巻二十三通写し、お寺に所存していた。それだけでは足らぬ、上人直筆の御文章をと懇願したが、上人は「文ハトリオトシ候ホトニ、タ・心ニ信ヲタニモトリ候へは、取りオトシ候ハヌ」と返した。文に書かれたものではなく、信心こそが根本であるぞよ、文はなくとも直々に教えは伝えるというお諭しであった。しかし翁が翌年上洛した折に、一文を認めて下賜されたという。また直林師『妙好人』によると、蓮如上人は三十歳前後の道宗翁を評して「後生ヲ大事ト思テ、仏法ニ心ヲカケ此六年ノサキヨリ当年マデ、毎年上洛」と褒めていたという。

大和の清九郎翁

大和の清九郎翁は延宝八年の生まれで寛延三年に没している。記録に残っているのは今から約三百年前であり、道宗翁の時代からは二百年ほど後になる。清九郎翁の生き方は四十年ほど後である享保六年生まれの学僧仰誓和上の心を捉え、初の妙好人伝が編まれることになっていく。和上は、篤信者であったという清九郎翁の噂を聞き及び、二度に及んで大和まで足を運んだ。清九郎翁が没する前年のことであった。清九郎翁に接した和上は「歓喜ノ泪ニムセビ」、「吾身ノ浅マシキコトモ実ニ思ヒ知」らされたという。ここに、意識的に同時代の妙好人の存在を知って興味を持ち、遠路遙々と訪れるという先例になった様子を窺うことができよう。間接的に伝え聞くだけではなく、直にその人柄に接して信心の有り様を見聞きたいという熱意が表れている。この事績によって、仰誓和上自らも妙好人に列せられたも同然と言えるであろう。

清九郎翁、生まれは大和国高市郡矢田村であったが、幼少の頃に母の生地であった丹生谷村に移り、幼い頃に父を亡くした。母の生家は、大谷派因光寺の門徒であった。やがて下市近辺に奉公に出たが、母を思いやって仕事を終えた夕方に奉公先から母の元に帰り、身の回りの世話をし再び奉公先に戻ったので「モハヤ加減モ損シタル冷ナル」夕餉を感謝のうちに食したと伝えられている（直林師の著）。しかし生来読み書きや勘定もままならなかった故か、丁稚奉公を辞めてしまい次第に身を持ち崩していった。母はそのような息子を立ち直らせようとして、法座で知り合いになった女性と娶せた。それでも清九郎の暮らしぶりは改まらなかったが、夫婦の間にこまんという女の子が生まれた。その連れ合いが病に斃れて世を去ったのを契機とし

て「我に先達ハ知識なりといひて、法縁を慕ふ」と改心したという。それから後に、妙好人としての生き方が始まって今に至るまで語り継がれているのであろう。

更に、娘のこまんについても連れ合い選びで自分自身と重なるような由縁が伝えられている。こまんの相手は、無頼者と悪評高かった久六という男であった。その頃は翁が篤信の門徒となっており、日々拝読していた御文章を、久六は事もあろうに燃えさかる囲炉裏の火に投げ込んでしまった。翁はその御文章を火の中から拾い上げ、「如来の凡夫済度」という御苦勞と重ねて味わわれたという。これを契機として久六も改心して念仏者になったというのであるから、自分だけではなく周囲に影響を及ぼすような存在になっていったという事績である。

三河のお園媼

直林師の年代記によると生まれは安永六年であるが、藤師は没年から逆算して安永か天明頃としか特定されていない。没年は幕末の嘉永六年、安永六年生まれとすると行年七十七歳である。清九郎翁より百年以上、後代の同行である。

藤師の説くところによると、「あんたのお師匠はどなたで御座いますか」という問いに対して「わたしの師匠は三文の柱暦のようなものであろうぞえのう」という答えであったという。これは、師匠は誰でも柱暦のように間違いはないというように解されているが、当時の碩学であった香月院深勵和上や開悟院正慶和上の教えに感化されたものと察せられる。ある折りに媼は蓮如上人の御文章に「往き易くして人無し」とあった教化に不審を起し、六十里の道を遙々と京に上って香月院和上の教えを請うた。和上は「往き易くして人なしというはなあ、お前やわしがまだ飯食うて娑婆に生きておるさかい、お浄土に人がないと仰せられることじゃぞ」とお諭しになったという。媼は「それではこの園がまだ飯食うて娑婆に生きているからお浄土に人がないとは有り難い、有り難い」と躍り上がって喜んだ。ただその一言を聞くために、千里の道も遠からずと足を運んだのであった。

石見の善太郎翁

石見という地は、「石州学派」と称されるように真宗教義を極めた土地柄であり、それに応じるかのように多くの妙好人も出ている。善太郎翁もその一人である。生まれはお園媼の五年後に当たる天明二年で、没年は三年後の安政三年、行年七十五歳であった。お園媼とほぼ同年代と考えて差し支えなからう。家は那賀郡有福村にあり、千田村浄光寺の門徒であった。

翁は伊藤師『妙好人めぐりの旅』では有福^{ありふく}の善太郎さんとして採り上げられているが、そこで「草餅説法」が伝えられている。翁は生涯に九度も本山詣りを果たしたが、行き帰りに芸州可部で同行の家に立ち寄ることを常としていた。ある年、翁が立ち寄って出立した朝のこと、裕が一枚行く方知れずになった。お手伝いさんに尋ねたところ、「善太郎さんが持って行きました」との返答で、家の者も皆それを信じた。その後、可部の同行は有福温泉に湯治に来て善太郎さんの家に寄って盗みを咎立てた。すると翁は「そりゃ、悪うござんしたのう。家内がおりませんで、着物はどこかわかりません。これでまどいますけえ、どうかこらえてやんなさい」と裕の代金を弁償した。加えて、「何もないけど、この仏様のお下がりの草餅を持って帰って、家の人にあげてやんさい」と草餅を渡した。家に帰った可部の同行は「餅に罪はない、皆で食べよう」と配ったが、お手伝いさんだけがどうしても食べようとしない。理由を尋ねると、「私のような罪深い者がこの餅を食べたら、どのように恐ろしい報いを受けるかしれません。

あの裕は、私が盗んだのです」と白状した。家の者は皆驚いて「善太郎さん、知らずにいたとは言いながら、散々罵ったことの恐ろしや。勿体ない、勿体ない」と詫びて後にお金を返したという。無実の善太郎さんに罪を着せるという後味の悪い挿話であるが、ここにも妙好人としての心得が話に盛り込まれているように思われる。即ち、どんなことがあっても他人に罪科が及ぶことのないように、仮に自分が罪を被ることになろうとも甘んじてそれを受けるという態度である。近代的な価値観から判断すれば、正邪を曲げて責任の所在を曖昧にするのは好ましくないと考えるであろう。しかしこのように、真理を枉げてでも利他を図ろうとする妙好人の考え方と近代合理主義の乖離が広がってきた事情が窺われる。

讃岐の庄松翁

時代は下り、讃岐の庄松翁は幕末にかかる寛政二年の生まれで明治初年までの生涯である。真宗には大きな派だけでも十派あるが、庄松翁は興正寺派勝覚寺の門徒であった。讃岐国大内郡壬生村字土居の生まれで一生を独り身で通した。翁の来し方を記したのは、遙々松前藩から訪ねてきた徳太郎という同行で、後に諦順師が後編を足して『庄松ありのままの記』として今に伝わっている。藤師の評では、庄松翁は清九郎翁と並んで古今妙好人の双璧とも謂うべき、という絶賛ぶりである。

真宗教義史から、興味深い展開が見られる。翁は当初、身口意という三業において救済願求の心を表顕せねば救われぬという異安心に囚われていた。世に謂う三業惑乱である（朝枝善照師、全集第二巻）。ところが幸いにして檀那寺の弟子に周天という篤信の僧があつて、懇ろに翁を諭して正義に立ち返らせた。これを喜んで翁は逢う度に「周天如来、周天如来」と礼拝したという。その後ある折り、とある僧が翁に三業安心の是非善悪を問うたところ、「三業どころか一業もないには困る、困る」と答えたというのである。これは翁が自分の懈怠を省みて発した詞であろうが、三業安心を痛烈に批判しているところが痛快であるという藤師の評である。

長門のお軽姫

長門国豊浦郡六連島は関門海峡に浮かぶ島で、お軽姫は享和元年にここで生を受けた。今から二百二十年ほど前である。家督を継いで養子を迎えたが、その夫が不貞に走ったことによって説法を聴聞する機縁を得たのであった。夫との間にあった蟠りもやがて氷解し、俱に連れ立って法座に通う姿が見られたという。往生の際には「なきあとに かるをたづぬる人あらば 弥陀の浄土に、、、」と辞世を詠みかけて息絶えたと伝わる。幕末の安政三年、行年五十六であった。

近江の興市翁

興市翁は椋田姓で、近江国坂田郡入江村に生を受けた。時は幕末天保十二年で、二十七年後に明治維新が始まるという時世であった。幼少の頃より求道の志厚く、二十歳頃には寺参りがし易いように兄の家を出て一人暮らしになった。所有する農地が狭かったので、一月を三分して十日は自家の畑を耕し、十日は人に傭われて賃仕事、残りの十日は仏法聴聞に明け暮れたとされる。言行録には、畑で穫れた大根を彦根や長浜の街へ売り歩いたり、入江を埋め立てて米原駅を建設する作業に従事した話が盛り込まれている。このような言行録は翁自身の筆によるものではなく、没後に近親者によって編まれた『興市話記』や手次寺住職であられた河村義雄師による刊本『是人名分陀利華——興市同行念仏抄』が遺されている。ここに、妙好人の行跡

がどのように遺されたかを知ることができる。

因幡の源左翁

因幡の源左こと足利源左衛門——源左衛門というのは土地の習慣による通り名で、本名は足利喜三郎という——は、幕末の天保十三年、気多郡山根村生まれである。家業は農業の他に楮を材料として特産因州和紙を漉いた。安政六年に父の善助が流行病で急死し、十八歳で一家の担い手となった。その三年後に村内の小林くにと妻夫になり三男二女に恵まれるも、この子ら全員に先立たれてしまう。二度の火災に遭遇したことに加えて、八反あった田畑や持山も手放すという不運に見舞われた。そのような逆境にもめげずに、門徒としての信心に支えられて妙好人という評判を得たものであろう。

源左翁は「死とは何か、親様とは誰か」という問いから始まって、生涯に亘って仏道を問い続けた。最初の問いかけにしても、優れて哲学的な趣を有していた。そういう生涯は、まさに求道者と言えるであろう。昭和五年に没したのは行年九十歳であった。没後まだ百年に至っていないのは、「今を生きた人」としておこう。

浅原才市翁

浅原才市翁は幕末の嘉永三年、石見国大浜村に生まれた。十八、九歳頃から聞法に勤めたものの、後世に遺るような自分の信心を書き留め始めたのは五十を過ぎてから、という。その頃には下駄作りを生業とし、下駄を削る際の本屑や鉋屑に思いついた事を書き留め、夜にそれを小学生用の帳面に清書するのを無上の楽しみとした、と伝えられている。日々の生業を大切に、その中で信心に喜びを戴くという、妙好人として理想的とも思える日暮らしであったものと思われる。妙好人全般について言えることであるが、今に至るまで遺されている言葉というのは文章として書いたものは和歌の形式やそれに準ずる形であり、より生前の語り口を伝えるのは話し言葉そのものである。信心の有り様を自らの言葉として発したのである。それは生活と一体になった真実の発露であると言えよう。

斎藤政二翁

最後に採り上げるのは斎藤政二翁である。大正八年生まれ、昭和五十九年没であるから、まさに現代に生きた妙好人であった。大正生まれというのは廃藩置県成って久しいが、朝枝善照和上編になる伝記にも『安芸の妙好人』という副題が付いている。当時の山県郡雄鹿原村で生まれ、八歳までに両親を亡くした。その後は叔父に後見をせられ、二十二歳で近衛歩兵一連隊に入隊した。対英米開戦前年である。五年で敗戦となった。翁の伝記には、折に触れて詠んだ短歌が伝えられている。命終える際は、先人の智慧に頼る他はないのである。その教えに照らされて、進むべき道が白く浮かび上がっている如きである。政二翁、行年は六十六であった。

以上の十人は、妙好人列伝とも言うべき書物には必ずと言えるほど採り上げられている。これは妙好人研究が代々受け継がれているという伝統とも言えるであろう。妙好人としては門徒の間では価値を認められているものの、一般的にはあまり知られていないと言えるであろう。それは即ち、信心に重きを置いて日常生活を営んでいた故に実業で名を成したり財産形成をするというような世俗的な事業については無欲であった心持ちの現れであったと考えられよう。

妙好人という評価は結果として、一人の門徒が生を終えてからその信心ぶりについて自ずと定まるものである。

ことほど左様に「このような人物を妙好人と呼ぶ」というような限定された定義があるものではないので、研究者によって採り上げ方は随意である。以下では、この十人以外に扱われている妙好人の生涯を見ていくこととする。

加賀の千代女

西山郷史師は『妙好人 千代尼』として一書を成している。加賀の千代女として知られ、「朝顔に 釣瓶取られて もらい水」が代表句として人口に膾炙している。井戸の釣瓶に朝顔の蔓が巻き付いて、水を汲むことができない・・・「やれやれ、どうしたものか、、、」という状況を詠んだ句である。自然を大切に、あるがままを楽しむという日本人の心性を詠み込んでいると言えるであろう。「夏が終わって朝顔が枯れるまで、このままにしておくのか」というような心配は無粋というものであろう。

帯の惹句には「徳富蘇峰氏に、西行法師に匹敵する俳人と評された」と紹介されている。西行法師の時代に俳句はなかったのであるから、随分と乱暴な括り方ではあるが、千代女の価値をそれだけ評価しようという意図は伝わる。

千代女の生まれは元禄十六年、赤穂事件の二年後であった。北国街道の松任宿は門徒が多い地であった。

千代女詠としてよく知られた句で

蜻蛉釣り けふはどこまで 行ったやら

が伝えられている。一茶翁の引用では下五は「行た事か」とされている。この句を詠んだ背景には、悲しい事情があった。千代女の息子であった弥市を失った悲しみが織り込まれているのである。これが我が子の元気な成長を喜んでいるのであれば、平凡ながら親としての幸福に満ちあふれている様を想像することができる。しかし親として我が子に先立たれるというのは、愛別離苦の中でもこれ以上はないという哀切の極みであろう。そのような背景を織り込んで味わうと、老少不定という教えが身近に感じられる。今は亡き我が子が蜻蛉釣りに夢中になって日が暮れを過ぎてても帰ってこないのを心配していた当時の回想か、はたまた近所の子供がまさに蜻蛉釣りに熱中しているのを詠んだものか・・・この句も、多様な読み方ができるという点で人の心を惹きつけるものであろう。

同じように幼い我が子に先立たれた一茶翁の句には

露の世は 露の世ながら さりながら

とある。我が子の儚い命を露に譬えており、表現としては分かりやすい。意味論的に分析すると、「露は露である」という同語反復であって何も言っていないのに等しい。下五の「さりながら」が、「そうではあっても、、、」というので余韻を生み出しているのである。「露の世ながら さりながら」という繰り返しも味わいが深い。人の親として哀切きわまりない、子に先立たれるという思いを籠めている。このように俳句というのは、日本文学が生み出した僅か十七音のうちに遙かな広がりを持つ世界観を封じ込める工夫が成されていると言える。

子を失った哀しみを詠んだ句に

破る子の なくて障子の 寒さかな

も遺されている。これは蜻蛉釣りよりも直截的で、元気で居れば家中の障子を破り回って、そ

それはそれで後始末をせねばならぬが、それが無い寂しさをありのままに言葉にしてある。子の成長はあっという間で、手がかかる頃の大儀さは後で思い返すと懐かしいものである。しかし子が無事に成人になって思い返すのと、何十年を経て偲ぶのとでは天地ほどの開きがある。

千代女は、このような経験から剃髪して出家を成し遂げた。法名を尼素園と号した。六十二歳の折に、五百四十六句を収載した『千代尼句集』を上梓した。以降、『俳諧松の声』（三百三十六句収載）、『自選俳句集』（七十六句収載）と続いた。俳人として、充実した人生であったと言えるであろう。安永四年、行年七十三で没した。

一茶翁

上述のように、一茶翁は千代女の俳跡を慕い続けた。我が子に先立たれるという境遇も共通であり、他人事と思えなかったのであろう。千代女より五十年ほど後、宝暦十三年五月五日に信濃国柏原で生を受けた。手次寺は本願寺派の明専寺であった。三歳で実母を失い、八歳で継母を迎えた。その折に

われと来て 遊べや親の ない雀

と詠まれた。幼心に、実母を亡くした心境が痛々しい。これは翁の生涯を通じて一貫していたのであろうし、ご自身も幼い我が子に先立たれるという逆縁に遭われた。人の縁としても、これほど重なる不幸はいかばかりかと悼まれる思いである。このような巡り合わせの中で信心がどれほど支えになるのか、考えてみなければならないであろう。人が人として生まれてきて、四苦八苦は避けて通ることができない試練である。そうとしても、三歳で実母と死別し、我が子にも幼くして先立たれるという不縁は「何故にこのような苦しみに耐えねばならぬのか」と考えるのが自然と言えるほどであろう。そのような実体験が句作として後世に残されたと味わうべきであろう。

撫子や 地藏菩薩の あとさきに

この句にも、そのような心情が滲み出ている。ただただ両手を合掌してお称名を唱えるしか、その心情を偲ぶことはできないであろう。医療が進歩して救われる命が増え、結果として平均余命は八十歳代半ばまで延びてきた。特に出産直後から幼少時までの医療体制が整うことによって、幼い命が守られてくるようになったのが、長寿化の恩恵である。逆に考えると、近代医療が普及するまでの時代は、命は常に危険に晒されていたのである。ちょっとした病が命取りになった。抵抗力がない幼児や高齢者は、頼る術がなかった。

自身が幼くして親を亡くしたことが関わったのか、初婚は五十二歳の折で、相手は「きく」という名で二十八歳の娘であった。生国の越後は雪深い地であった。

これがまあ 終の棲家か 雪五尺

という句が遺っている。小動物に対する眼差しは、生来の孤独感を映していたものであろうか。

雀の子 そこのけそこのけ お馬が通る

やせ蛙 負けるな一茶 是にあり

子雀に対しては、「お馬が通るから、踏みつぶされないように」という心遣いが窺える。二句目は蛙同士が相撲を取っている場面であろう。見るからに体格で劣る方を応援しているという心意気が読み取れる。実生活の面では一茶翁はこのように一般人が気付かないような小動物に気配りをする反面で、農作業など実利に繋がるところには全く興味がなかったのであろう。「浮き世離れ」した作俳人生であったと言える。

最晩年の句には、お浄土へのお迎えを意識したかのような心境が覗かれる。

ともかくも あなたまかせの 歳の暮れ
ぽっくりと 死が上手な 佛哉
御仏は さびしき盆と おぼすらん
御仏や 寝てござっても 花と銭

一句目、「あなた任せ」とは阿弥陀如来のお力にお頼りして極楽往生を願う心情であろう。他力本願という真宗の心得を端的に示している。今と異なり、米にしても味噌にしても醤油にしても掛け売りが基本で、歳の暮れに取り立てが集中した。それは上方噺『掛け取り』などでも、長屋の住人が店の掛け取りとの駆け引きで支払いを待って貰おうという苦労が活写されている。現実世界としては、そこまで想像したくなる場所である。他方で精神世界からどう読み取ることができるかと考えてみると、一年を振り返って「ああ、あんな事もあった、こんな事もあった」と思い出している場面もあり得るであろう。両様に読むことができる辺りが俳句鑑賞の長所である。

二句目は、自分自身も苦しむことなくぽっくりとお浄土にお詣りしたいという願望が宿っているように思われる。ここで言う「佛様」は亡くなった遺人を指すのであろう。長患いもせず、周囲に迷惑をかけることなく往生を成し遂げたことを羨み「自分もそうありたい」という願いが込められているように思う。

三句目と四句目は、厳しい現世とは異なる苦のない極楽への憧憬とも読めるような印象である。私生活では晩婚で、子に先立たれるという不縁にも見舞われたが、それを含めて現世の定めとして受け入れざるを得ないという心境に達したのであろうか。門徒として、また妙好人としての生涯を全うされたものと受け止めておきたい。文政十年十一月十九日に往生の本懷を遂げられた。行年六十五であった。

良寛和尚

次に採り上げる良寛和尚も、妙好人としてのみならず出家者として世間によく名を知られている。生まれは宝暦八年で、一茶翁より五歳年長である。越後国出雲崎という地は日本海に近い。冬は豪雪で出歩くことも不自由であったろう。越後と信州は隣り合う地であり、一茶翁と良寛和尚には共通点が多い。

生家は出雲崎の庄屋である山本家という家柄であった。俗名は栄蔵であったが、十八歳の折に曹洞宗の光照寺で出家した。庄屋を継ぐ必要がなかったので出家したものであろうか。父母との関係は入り組んでおり、弟に家督を譲ったのもその事情が絡んでいたようである。二十二歳の折に、良寛という出家名の名付け親である備中円通寺の十世であられた大忍国仙師に従って備前に旅立った。それ以来、十七年の永きに及んで国仙師の下で修行を積んだ。師の隠居後も数年は円通寺に留まったが、示寂後は諸国を経て越後に帰った。越後には帰ったものの出雲崎ではなく国上山の中腹に五合庵という庵を結んで居を定めた。庵での暮らしは清貧そのもので、禅の教えを実践するが如くであった。

良寛和尚は漢詩も作り、多くが今に伝えられている。五言絶句を一首、引用しておく。

西方安楽国 南無弥陀仏 一念又一念 往生何所疑

結句のみ「往生、なに疑うところぞ」と読み下す以外は、そのまま読める。助詞の追加も必要ない。無為無体物の境地である。但し、通常の五言絶句として韻は踏んでいない。技法と

しては何ら難しい工夫はなく、そのままに読んでずっと頭の中に入ってくるような造作になっている。これも和尚の人柄を表象していると言えようか。

しかし和尚の信心ぶりをよく伝えているのは、次に挙げる和歌の類である。藤氏『妙好人列伝』から引用する。

み佛の しろしめしつる 古を 今にうつして 見るがたふとさ
世の中に 何が苦しと 人間はゞ みのりを知らぬ 人と答へよ
水の上に かずかくよりも はかなきは み法をはかる 人にぞありける
かにかくに 物な思ひそ 弥陀仏の 元の誓ひに あふとおもへば
八ちまたに ものなおもひそ 弥陀仏の もとの誓ひの あるにまかせて
不可思議の 弥陀の誓ひの なかりせば 何をこの世の 思出にせむ
我ながら うれしくもあるが 弥陀仏の います御^{みくに}国へ ゆくとおもへば
またれにし 身にしありせば 今よりは かにもかくにも 弥陀のまにまに
おろかなる 身こそなかなか うれしけれ 弥陀の誓ひに あふと思へば
極楽に わがち、は、は おはすらむ 今日ひざもとへ ゆくとおもへば
良寛に 辞世あるかと 人とはば 南無阿弥陀仏と いふとこたへよ
くさのいほに 寝てもさめても 申すこと 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
こゝろもよ ことばも遠く とゞかねば はしなく御名を 唱へこそすれ

全般に、漢字が少なく仮名が多い表記である。

一首目は抽象的な趣である。「いにしへ」というのは、原始仏教を想起させる言葉遣いである。恰も釈尊が二千年來の往時に唱えられた元々のみ教えを今の世に実践せんとするかの如き意気込みである。

二首目「みのり」は「御法」であろう。このような場合は漢字で書いた方が理解が早い。憂き世で仏法を知らぬ人が、何が苦しいかと問うている。御法を知らぬ者が最も苦しい、そのことを悟れ、という意である。三首目は「み法」という書き方になっている。「水の上に数を書く」と言うのであろうか、これは些か真意を量りかねる。水面上に数字を書いてみる、というのであれば確かに覚束ない動作である。これを人の世に仏法を求めるといふ術に譬えているのであろうか。そうであるとしても、良寛和尚の求道法は掴み所がない。やはり禪宗特有の自力専修で、自らを責めて悟りを求めるといふ方向性であるように思われる。何を求めれば悟りに至るのか、自分で考えなさいと突き放されているように感じるのは阿弥陀如来にお縋りするという心性が身に染みついているものであろうか。

しかしながら四首目で「かにかくに ものなおもひそ」というのは、「あれこれと余計なことを考えずとも良い、阿弥陀如来のお力にお任せすれば良いのであるから」というように受け取ることができよう。「阿弥陀如来の誓願にお任せする」という意は、真宗で「無量寿經」第十八願に重きを置くという考えに通ずる。十八願は、どのように深重な罪を背負う者であっても必ず救い取るぞよ、極楽浄土に導くと仰せられている。ただ一心に南無阿弥陀仏と唱えよ、他念あるべからず、と説かれてある。それは五首目で「八ちまたに ものなおもひそ」に通じている。世事は四方八方に広がって際限がないが、それは憂き世の泡沫である、瑣事を放念するという境地を得ることなしには求道はままならぬ、という心得である。凡人は世間との繋がり^{うたかた}を断ち切るには、大きな覚悟が必要である。それができてこそ、真の出家成道が成し遂げられるのである。

六首目は、いよいよ極楽往生が近づいている心境を詠んだものであろうか。「うれしくもある」は「うれしくある」に比べて、「も」一字があることによって恐怖の念も併存していると思われる。往生は本懐を遂げるのであるから喜ばしいことであるが、他方でこの世とお別れせねばならぬ。加齢と共に体に不調を来したり病の床に伏せることも、臨終への恐怖を募らせることであろう。周囲の者との離別もある。これらを乗り越えて悟りを開くというのは、出家の身と雖も難しいであろう。

七首目「またれにし」は阿弥陀如来がお浄土で待ち受けていることを受け身形で詠み込んだものであろう。ここでも「かにかくに」を繰り返している。あまり深刻な意味合いがないだけに、用いるのに便利であると言えよう。「今よりも」は「これからは」という意で捉えておく。全体を現代語訳すれば「阿弥陀如来に待ち受けられる身であるから、これからは如来の意のままに生きていこう」というように解されよう。

八首目は自分を愚かと卑下し、なおかつそれを喜ぼうとしている。「なかなか」という副詞は、どの程度を指しているのか漠然としているので曲者である。仮にこれを「本底」とすれば、真情が籠もることであろう。どこまで自分の真情を盛り込んでいるのやら曖昧模糊とした「なかなか」では、踏み込みが足りない。

九首目は、見送った父母を偲ぶ気持ちが切ない。長寿化が進んだ今でこそ、男女ともに平均余命は八十歳代で曾孫の世代を抱くことが普通になってきている。しかし三百年前では「人生五十年」と言われ、孫の顔を見ることさえ望みがままならぬという短命の時代であった。自分も年を取ると共に父母へ追慕の念が募っていくという心情を読み取ることができる。そのような時代にあつては「人生七十年、古来稀なり」であった。良寛和尚は十分に天寿を全うしたと言えよう。そうしてそういう長寿の余録として最晩年までの句作が後世に伝えられているという事実がある。

十首目で辞世に言及しているが、実際には後でみる一首を遺すことになる。禅僧として出家しながら、墓は浄土真宗の隆泉寺に建てられた。曹洞宗も真宗も南無阿弥陀仏を唱えるという点では共通している。和尚晩年の信心が曹洞宗と真宗のどちらに向けられていたのか、もっと探してみたいところである。ここだけの解釈に集中するとすれば、専修念仏という結論を得ることもできそうである。

十一首目で「草の庵」というように我が暮らしに言及している。想像してみると、好んで暮らしていると言うものの修行の一環として清貧に堪え忍ぶという趣を徹底する必要があつたであろう。夏は暑く、冬は厳しい。食べるものとて、空腹を満たすか満たさないかというような具合で、山海の珍味とは縁遠い食卓であろう。心底このような暮らしを楽しんでいたものか、あるいは何かの都合で普通の暮らしに戻りたいという願いがあつたものか——史実がその答えを教えてくれているようである。五十九歳の折に山を下りて、麓の鎮守に小庵を結んで移った。更にその十年後には、島崎村の木村元右衛門が勧めて裏庭に小亭を建ててそこに入ったという。やはり人里離れた山中で隠遁生活を送るというのは一つの理想であつて、現実には厳しかったと見える。

最後の詠はやや読み辛い。「心も言葉も届かない」というのは意味深長である。孤独で、周囲には心置きなく話せる相手も居なかったことを嘆いているのであろうか。それ故にお称名を唱えて心を無にするように努める——というのでは、悟りとは隔たりがあるように思われる。「はしなく」は『広辞苑』の見出しでは「はしなくも」という語形で「これといったきっかけ

なく、思いがけず、はからずも」という語釈がある。周囲を見回しても誰も居ない、言葉をかける相手とて見当たらない、自分で好んで選んだ境涯とは言うものの、御名を唱えるしかないか、、、そのような暮らしぶりが偲ばれる。

最後に、辞世を見ておきたい。

かたみとて 何残すらむ 春は花 夏ほとゝぎす 秋はもみぢば

四季を詠み込んで、花鳥風月に遊ぶ境地である。行年七十四、もう十分に人生を楽しんだ、花鳥風木の美しさも堪能した、思い残すことはない、形見もないぞよ、という遺言であるように味わってみたい。天保六年正月六日の夕べであったという。春の花は桜であろうか。四季の美しさを詠み込むということは、現世への心残りを反映しているとも考えられる。人の子であるからには、現世に心残りがあって当然である。「形見に残す物はないが、この世を去るについては後ろ髪を引かれる思いである」という率直な真情の吐露である。辞世を見る限りからは信心の世界を離れているようでもあるが、それまでの歌作は阿弥陀如来のお力にお頼りして極楽往生を遂げるといふ思いを託していたのであった。

第三節 妙好人伝の系譜

前節後半で採り上げた三人は、一般的な定義での妙好人には当て嵌まらなないと考えられる。即ち、妙好人とは市井の篤信者であり無名であることを前提とする。その点、千代女にしても一茶翁にしても良寛和尚にしても、文人として名を成している。そして俳句や歌作で著作も遺されている。専ら俳句や歌作が本業であり、信心はその背景にあったと考える方が常識的であろう。しかしながら、その本業と信心が分かち難く一本の糸で結びつけられているという点も心得ておかねばならない。

真宗特有と思われる信心のあり方として妙好人について一書となった例は多い。伊藤智誠師『妙好人めぐりの旅』、菊藤明道師『鈴木大拙の妙好人研究』、白川晴顕師『妙好人のことは』、鈴木大拙居士『妙好人』、直林不退師『妙好人 日暮しの中にほとばしる真実』、西山郷史師『妙好人 千代尼』と、真宗関連出版物においても質量共に一つの中心を成すと言えるほどの分野であると言える。

同時代の妙好人について興味を持ち、その言行を記録に残そうとする試みは、いつの時代に始まったものであろうか。

妙好人列伝は仰誓和上以来、篤信門徒の記録が脈々と伝えられているのであるが、その妙好人伝を編んだ側の歴史を辿ってみるのも大きな意義が見出されることであろう。大和の清九郎翁に会うために伊賀上野から吉野まで出掛けた仰誓和上のように、妙好人と出会うことによって、その生き方を書物に残そうという気持ちが自ずと生じてきたものであろう。そのような同時代的重なりというのは貴重である。また同時代人でなくとも、時を経てなお語り継がれる程の篤信ぶりは、積み重なれば歴史となるほどの重みを成すのである。

藤師は『妙好人列伝』仰誓和上の章で、妙好人伝の濫觴を平安中期である長保四年、慶滋保胤著の『日本往生極楽記』に求めておられる。その続編として約百年後に大江匡房卿（長久二年生、天永二年没）著の『続本朝往生伝』が編まれた。時代的に、これら往生伝は真宗立宗以前であるから、諸宗派に及んでいた。「妙好人伝」と銘打ったのは仰誓和上が初であり、和上

の二十五回忌を期して法嗣である履善師が校正を施して上下二巻として上梓したのが文政元年であった（朝枝善照師、全集第三巻による）。仰誓和上のご生誕からは百年近く、清九郎翁との対面からでも七十年が過ぎていた。

本稿で生涯を追うた妙好人十三人のうちでは、道宗翁が蓮如上人と同時代と特段に古いのである。翁は上人のお側に仕えていたこともあり、『蓮如上人御一代記聞書』にその言行が伝えられている。妙好人と限定せずに、篤信の在家信者として今にまで伝わっているのは稀有なことである。以下では、仰誓和上以降を項立てしていく。

仰誓和上と玉譚和上

直林師は、仰誓和上をもって妙好人伝編纂の嚆矢とされている。和上は今から約三百年前の享保六年に京は高辻西洞院に生を受け、数え九歳で父の寂便師が住する本願寺派明覚寺に入った。剃髪時の名は祇円という。寂便師は蓮如上人九世の末裔であったという。父子共に伊賀上野に移った後に祇円師は名を仰誓と改め、『三帖和讃触象記』を著した。ご本山からは実成院という院号を賜った。和上が清九郎翁と対面したのは翁の最晩年であったが、和上は数えの三十歳という若さであった。和上は「世間ノ人ハ、吉野ノ花ヲ詠メントテ、ハル／＼至ル人ハ多ケレトモ、我々ハイカナル仏祖ノ御引合ニヤ、信者ノ花盛りヲヨメントテ、吉野ノ奥ニ下リシハ、マコトニ不可思議ノ因縁ナリ」と記しておられる。

また藤師の伝えるところによれば、仰誓和上は「予も二三の同行をうちつれ今茲寛延二年の春二月に彼地にいたり、清九郎に対面して、住家のわびしきありさまもまのあたり見侍りぬ」、「かほど目出度信者に今まで値遇せざりしは浅猿しきこと」とある。丹生谷の住まいは僅か二間ほどの藁葺き小屋を山の脇に建て、家の中は筵が二枚か三枚、道具と言えば釜一つ茶碗二つ三つしかなかったという。

和尚は大和の清九郎翁と同時代に生き、妙好人としての生き方を記録に留めた仰誓和上をもまた妙好人であると翼賛する考えがはっきりと示されている。純なる信心を持つ者同士は、一言二言交わただけでお互いに通ずるものがあるであろう。篤信の人と出会い、その信心に感ずるところあって、その生き方を後世に伝えたいという思いがまた自らをその境地に高めていったものであろう。その伝で考えれば、藤師もまた妙好人の一人に列せられて然るべきであろう。

菅真義師

石州学派の流れを汲む、本願寺派光現寺に大正十一年に入寺した菅真義師は明治十二年の生まれであった。善太郎翁の住まいに近く、翁は光現寺に聴聞に通っていたのであった。翁は筆まめで手紙などもよく書いたが、筆跡が独特で判読が難しかったという。そこで真義師が資料を纏めて『分陀利華』など刊本にした。

才市翁伝に連なる系譜

前節では直林師の妙好人伝に倣い、十三人の列伝とした。その中でも、才市翁は必ずと言えるほど妙好人伝には欠かせぬ存在であって必ずその一人に数えられていた。妙好人伝の数だけ才市翁伝が遺されていると言える。それだけに、翁の生涯をどう捉えるかもまた趣が異なることであろう。年代順に追ってみたい。

朝枝善照師

妙好人研究で最も体系的に遺されているのは、朝枝善照師の全集三巻本であろう。ここには、真宗研究の分野として妙好人が一つの重きを成すということをしめしているものである。

さて本筋を才市翁研究に戻すと、やはり石州学派に所縁があることを再認識するのである。朝枝善照和上は昭和十九年のお生まれで、石州浄泉寺の血脈に連なる。著作集が全五巻に編まれているが、そのうち第二巻と第三巻が妙好人基礎研究として組まれている。以下に、この二巻目次を採録してみる。

序論 『妙好人伝』 研究史

第一章 初篇『妙好人伝』の特色

第二章 『妙好人伝』の成立過程

第三章 編者仰誓の『自警』

第四章 石州学派と『妙好人伝』

第五章 石州学派と『高城家儀』

第六章 『親聞妙好人伝』と『妙好人伝』の関係

第七章 履善師とその周辺

第八章 石州学派と伝道

第九章 『遊方日記』にみられる石州浄泉寺の動向

結語

こうして全体の目次に目を通してみると、和上がどのように妙好人論を体系化されていったかを辿ることが出来る。本文には才市翁という見出しはないが、附録には才市翁から伝えられた帳面の書き付けを活字化して翻刻している。和上に至って、真宗の妙好人研究は一つの頂点に達したとも言えようか。仰誓和上に始まって、三百年近く弛みなく妙好人という生き方を追いつけてきたのである。しかもそれは孤立した巨峰ではなく、周囲には数えきれぬほどの峰々が連なっている。

そして、善照和上の法統を嗣がれたのが直林師である。数ある妙好人伝で、『日暮の中にほとばしる真実』という副題が付いた著書は、入門的位置付けとして最適であった。最大の特徴としては、幅広い真宗史の視点から妙好人の実践が教義とどのように関わってきたかを明らかにした点であると筆者は考えている。そして一人一人の生き方が親しみやすく伝えられている。その筆致によって、妙好人は如何にも身近に居る人として感ぜられるのである。それは即ち、門徒であれば誰もが妙好人たり得る存在であるということを語っているように思われる。これこそが、真宗における信心の在り方として柱となる心得であると言えるのではないだろうか。

直林不退師

直林不退師は朝枝師の薫陶を受け、妙好人研究の衣鉢を継いだ。その成果は『妙好人 日暮の中にほとばしる真実』という著となって結実したのである。師はまた、真宗独特の説教法である節談にも造詣が深い。節談説教は、セリ弁と呼ばれる五七調の名文句を結び近くに置く、古風な布教法であった。「前近代的」として一時は滅びかけたが、見直されて今では各地で大会が開かれるまでになった。その立役者が直林師である。節談は高座という高さ半丈ほどの台

に上がり、道具は中啓以外を用いず話術だけで聴かせようとするものである。話術として、太平記読みが講談になり、面白い噺を聞かせるのが落とし噺になったという歴史を辿ると、説教は話芸の源流であると言える。筋が山場に差し掛かると、満堂の聴衆が応えて「受け念仏」として六字名号を唱和する。このようにして、節談という説教の形は独自の発展を遂げた。元和から寛永年間にかけて安楽庵策伝和尚が『醒睡笑』を編んだのも、説教のネタ本として面白い噺を集めたのが下敷きになっていたのである。

第四節 結び

この小論では妙好人研究の系譜を辿ってきたが、通して概観してみると妙好人その人、あるいは研究者は皆ご本山と本学に連なっていることを実感できた。但しお東さんと大谷大学にも同じように伝統が受け継がれている点には注意が必要である。

第三節では妙好人伝を編んだ和上の足跡を追うたが、これも妙好人研究には欠かせぬ視点という意図で立論したものである。清九郎翁には仰誓和上、才市翁には慧達師と、妙好人を見出して「世に出した」後ろ楯があったのである。今では、説法を聴聞して妙好人が育ち、それがまた説法の譬喩因縁に取り込まれる、という循環ができているのではないであろうか。妙好人の言行録には、説法で聴聞した中身や文言が残っていたという例も近江の興市翁と真了師の間で見られた通りである。

妙好人という生き方に惹かれるのは、信心の発露そのものである。それ故に、妙好人の行跡を伝える事によって、書き手もまた同化していくというような経緯を辿ると言えるのではないだろうか。

本論で採り上げた妙好人伝を分類すると、何人かを総合して列伝体にした著と、一人だけに集中した伝記体とに二分することができる。西山郷史氏の『千代尼』は後者の例である。句作と信心の跡を深く掘り下げている。それに対して列伝体は、時代も背景も異なる何人かを比べることになる。それによって、多様な妙好人像を立体的に捉えることができるようになる。庄松翁のように、御門主の袖を引いて「兄貴、覚悟はできているか」と尋ねるような豪快な人物もあれば、備後の常女のように念仏の内にひっそりと生涯を終えた例もある（藤師『妙好人列伝』）。十人十色である。一人一人の生き方が多様であることによって、現代人の信心もまた各人それなりの心得を持つことができるであろう。

また、列伝の中には西行法師や解脱上人、僧丈草、僧廓三というような出家者も含まれている。一般的に「妙好人」というのは篤信の在家信者であると定義されるが、これは出家者を排除しなければならないという理屈にはならないであろう。出家者の本分というのは衆生を導くということであるから、その前提として自分の行いは常に正しくなければならぬという前提が考えられる。西行法師は武士の身を捨てて法門に入り、一生を花鳥諷詠で終えられたことで知られる。列伝で法師を巻頭に置かれた藤師は、その生涯全体を妙好人として味わわれたことであろう。在家であろうとも出家であろうとも、私心を捨てて信心に邁進する姿が他人の心を打つのである。

更に妙好人を類型化するとすれば、周囲の印象に残るような奇特な言行をする場合と、平凡なように見えても一日に何万遍もお念仏を唱えるというような積み重ねをする場合に分けられよう。列伝に遺るような妙好人像としては、前者の方が多いであろう。そして前者の場合、庄

松翁のように周囲がはらはらするような突飛な言行もあり得る。六連島のお軽唄も、漁師が舟を出さないような時化た日にも小舟を漕いでお聴聞に通い、周囲をはらはらさせた。逆に三河のお園唄は、常に名言で周囲を納得させた。

このように真宗には、妙好人という生き方を脈々と伝えてきた伝統があった。そこから浮かび上がるのは、日々の暮らしに感謝しながら朝な夕なに掌を合わせてお六字名号を唱えるという基本的な暮らし方である。誰もがそのお名号から入り、無心に阿弥陀如来との対話を試みているのである。真宗には戒律がないと言われるのは、自らが信心を通じて生き方を律していくという考えが根本に据えられているからであろう。

最後に、節談のセリ弁風に一節を留めておく（創作であり、「悪人正機説」を下敷きにしてある）。筆者がこれまでお聴聞を重ねて、耳に残っている言葉を連ねてみたまでであるが、妙好人の心持ちとはこのような境地であろうかと想像してみる機縁にしてみたい。

善人なおもて往生を遂ぐ 況んや悪人をや
然るを世の人 常に曰く
悪人なおもて往生を遂ぐ 況んや善人をや
開山ご聖人、親様は誰でも必ず救うと仰せられた
どのような悪人でも救うぞよ
極楽浄土に渡すぞよ
遠慮は要らぬ 身体一つで舟に乗れ
只ひたすらに念仏せよ、
拝み上げては南無阿弥陀仏
唱え上げては南無阿弥陀仏

参考文献

- 朝枝善照（2016）『妙好人伝基礎研究 正統編』京都：永田文昌堂。
安藤礼二（2018）『大拙』東京：講談社。
安藤礼二（2019）『列島祝祭論』東京：作品社。
石井公成（2017）『〈ものまね〉の歴史 仏教・笑い・芸能』東京：吉川弘文館。
伊藤智誠（2018）『妙好人めぐりの旅』京都：法蔵館。
角岡賢一（2020）「信仰と芸能という側面から見た説教」『節談説教』、節談説教研究会。
角岡賢一（2025）「妙好人という生き方」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第33号 17-49頁。
菊藤明道（2017）『鈴木大拙の妙好人研究』京都：法蔵館。
釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
白川晴顕（2015）『妙好人のことば——信心とその利益——』京都：本願寺出版社。
鈴木大拙（1976）『妙好人』京都：法蔵館。
鈴木大拙（2010）『日本的霊性 完全版』東京：角川ソフィア文庫。
関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
関山和夫（1991）『落語風俗帳』東京：白水社。
関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。

- 谷口幸璽（2004）『「節談」はよみがえる』京都：白馬社。
- 直林不退（2010）「説教の歴史と節談」『節談説教』第五号。
- 直林不退（2014）『名人木村微量の承継者 神田唯憲の節談』八王子：節談説教研究会。
- 直林不退（2019）『妙好人 日暮しの中にとぼしる真実』東京：佼成出版社。
- 西山郷史（2018）『妙好人 千代尼』京都：法蔵館。
- 府越義博（2010）「説教台本作成法」『節談説教』第六号、37～49頁。
- 藤秀璿（2013）『新撰 妙好人列伝』京都：法蔵館。